



「宮本らしくない作品とも(知人に)言われたんですが、じわっと味が出るというか、結構気に入ってるんですよ」

控えめに喜びを語る。

受賞作の「ウォール(＝壁) (五十枚) は、壁に漆喰(しっくい)を塗るアルバイトを、友達と五人で引き受けた高校生が主人公。

一人やめ、二人やめするなかで、最後までやり抜く意味、壁は壊れることを前提に作られると知った時の驚き、円形の壁が完成するにつれ、仕事の最初と最後が分からなくなるといふ発見…。壁を塗る単調な作業に、「生きる」とは「という問いを重ねた。

北九州大文学部在学中に、大岡昇平や武田泰淳ら戦後文学に傾倒した。自ら書き始めたのは

### 生きる本質見つめたい

二十代半ばから。中央の文芸誌などに応募し、六年前からは「詩と真実」にも参加している。

「現実にとだわり、人と人の関係を描くことで、生きる本質を見つめたい」という作品は、不安、苦悩、あるいは差別と、真正面から向き合う。

近作「真夜中の列車」では、障害者と健常者が共生するなかで浮上する差別、性、暴力などの問題を丹念に描いた。問題を乗り越える新たな「関係」の可能性を探り、今年の「部落解放文学賞」に選ばれた。

五年間、小学校で教壇に立ったが、県教委の個人学習診断テストに反対して退職。三年前、阿蘇郡一の宮町で、自閉症の青年や地域の障害者と、パンを焼き販売する喫茶店型式の障害者作業所、「夢屋」をオープンさせた。その時の大工作業が、受賞作のヒントになったという。

「これまでの現実につきすぎた作品から、はっきり飛翔(ひしょう)した」という選者評に、「今回は僕の意図を隠して、比喩的に仕上げた。こういう手法も、現代をかすめる方法じゃないかと」。さらりという言葉に、自信ものぞかせる。荒尾市出身。大津町大津。

人